

17 世紀尾張の茶入生産窯 ～横須賀御殿窯の再検討から～

● 武部真木

尾張藩の横須賀御殿では二代藩主光友が御庭焼を行っていた。東海市・烏帽子遺跡の調査資料の再検討から、御庭窯の窯体構造について考察するとともに、御庭窯で求められていた茶陶、なかでも茶入の製作環境について探った。17 世紀の尾張の茶入生産窯では、とりわけ効率という面では一般的ではない特異な状況が随所に認められる。武家茶道における当時の瀬戸茶入の評価を背景にした、尾張藩ならではの窯業政策があったと考えられる。

1. はじめに

東海市高横須賀町に所在する烏帽子遺跡では、1993 年、2000 年に愛知県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われており、縄文時代晩期末から弥生時代前期の時期の製塩土器を含む良好な資料群が得られたほか、古墳時代後期から奈良時代の集落跡が確認されている。江戸時代では、尾張藩の横須賀御殿内で行われた御庭焼に関連する遺物が出土したことにより「横須賀御殿窯」の存在が明らかとなった。

発掘調査報告および論考（小澤 1997）において、焼成品器種と特異な窯道具類に関して考察が行われ、「横須賀御殿窯」で焼成された御庭焼の詳細な内容が提示された。本稿では御庭窯の実態に迫る試みとして、その後の調査成果と窯構造に関わる資料を加え改めて検討を行った。併せて御庭焼開設の重要な目的のひとつである「茶入」の製作に注目し、17 世紀の瀬戸茶入の生産環境の特質を整理した。

2. 横須賀御殿窯の調査

横須賀御殿は、二代藩主光友一代の間に機能した尾張藩主の別邸（寛文 6 年に竣工～正徳 5 年廃絶）であり、東西百間（約 197m）、南北七十間（約 138m）の敷地をもつ「臨江亭」（邸宅群）とその北側に広がる広大な「御洲濱」（庭園）からなる。御庭焼の窯の位置に関連する文献史料は、①天明八年（1788）完成の『張州雜

誌』の絵図があり、「臨江亭」敷地外に隣接する南東の区画に「御カマヤキ」と描かれ、これが窯体の位置を示すとみられる記述である。②蓬左文庫蔵「横須賀御殿指図」（その 1～5、「元禄三年八月」銘の袋に収納）では敷地内側の御殿各部屋に名称の付箋が付されており、「瀬戸土置場」のほか「瀬戸物小屋」「大工小屋」など作業棟の存在が南東隅にかけて確認できる。③「横須賀御殿御広間御指図」の裏書きをもつ別の指図では、同上の施設が「御かまや土置所」「御かまや小屋」と異なる名称で記されている。

1991 年に行われた学術調査の報告書に示された「臨江亭」と「御洲濱」の配置復元案をもとにすると、1993 年と 2000 年の 2 次の発掘調査地点は、横須賀御殿の北東部の端から庭園との境界付近の範囲と推定された（図 1）。御庭焼関連遺物の出土地点（93B 区の西部と 00C 区東部）は臨江亭敷地推定範囲の外側で、庭園との境界をなす水路の南側にあたり、絵図等にみえる窯の範囲からは大きく離れている。

3. 出土遺物の再検討

烏帽子遺跡調査報告書の掲載資料および保管資料の再検討を行い、改めて図化したものを提示する（図 2～4、表 1）。

1, 2 は栓である。これは焼成中の窯内の状況を確認するための色見（テストピース）を取り出すための色見孔を塞ぐ蓋として用いる。凸部は窯の内部となり高温に晒され、平坦な面には栓の開閉時に把手となる棒を差し込むための円

形の凹みがある。製品のような精良な胎土が用いられるものではなく、高温と急冷を繰り返す使用環境により遺存状態の良い資料は少ない。1, 2の両者は円錐形の形状に復元が可能であり、1の最大径は16.0cm、高さ10.4cm前後と推定される。2は最大径14.8cm、高さ8.4cm前後と推定される。栓は主に連房式登窯で使用され、瑞浪市・田ノ尻窯（江戸前期）では「元（和）」の可能性が考えられるへう書きのある直径16.7cmの資料がみられる。

3は厚さ2.8cmの板状を呈し、硬質の焼成で歪みがなく均整のとれた塼のような部材である。端面が最も強く火を受けており、片面のみ赤変がみられず砂の付着が認められる。窯の内部での使用時には片面が壁に接する、あるいは床面に敷かれていたと考えられる。連房式登窯で使用する棚板の一部と思われる。

4, 5は柱状の窯体部材であり、報文では分炎柱とされている。4の直径は約14.0cm、欠損もあるがヨリ土の付着部分を除くと長さは約28cmを測る。数次の修復があり、被熱した明褐色の面をさらに覆ってヨリ土が貼り付けられ、全体に赤変がみられる。図上部のヨリ土には円形平底のものと接合していた痕跡が残る。

5の直径は約15.0cm、両端のヨリ土付着部分を除く長さは20cmである。表面は明褐色～暗褐色の色調があり火オモテの方向が明瞭に判別できる。通常、瀬戸・美濃系大窯（以下大窯）で 사용되는小分炎柱の直径は多治見市・小名田窯下5号窯跡（大窯第3段階前半）のように10cm前後のものが多く、土岐市高根窯沢窯（大窯第4段階末）で幅7.2cm～13.0cmである。天井支柱の規模では、瀬戸市小金山窯跡（大窯第1段階）で直径22.0cm、赤津B窯（連房式登窯第3小期）基底で47cmなどの事例があり4, 5はこれらの規模には及ばない。4の端部の圧痕を平底匣鉢の痕跡とすれば、平均的なものより直径は大きいが大窯に設置される小分炎柱の部材と考えられる。

6, 7, 8は用途不明の部材である。製品ほど精良ではないものの、砂礫が少ない胎土で作られている。全体の形状は不明で、幅は一定しておらず一方は開き端面を形成している。ただし6は端面も被熱しており、7では円形の置き跡のように一部に被熱していない範囲が認められる。8は直径約11.6cmの部材の一部であり、断面は丸みのある多角形となっている。被熱による赤変のない範囲が端面も含めて一部あり、

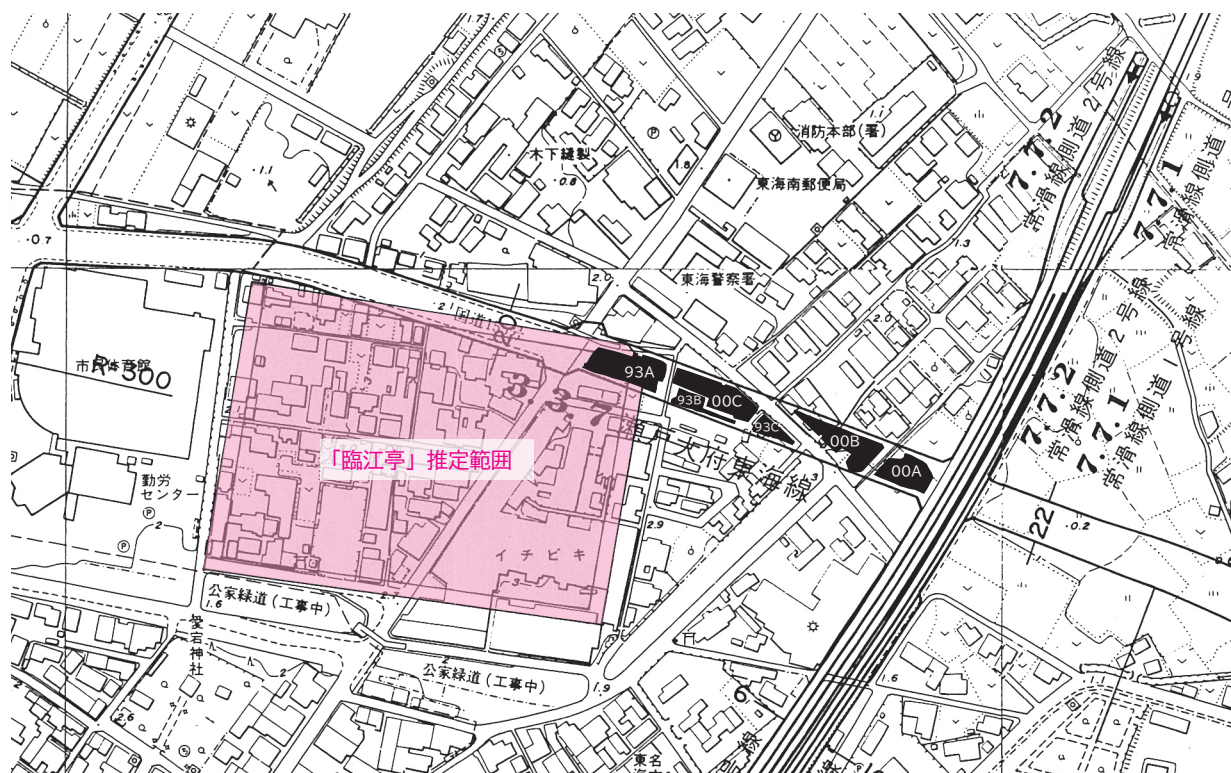


図1 烏帽子遺跡調査地点と横須賀御殿推定範囲（東海市1991付図に加筆）

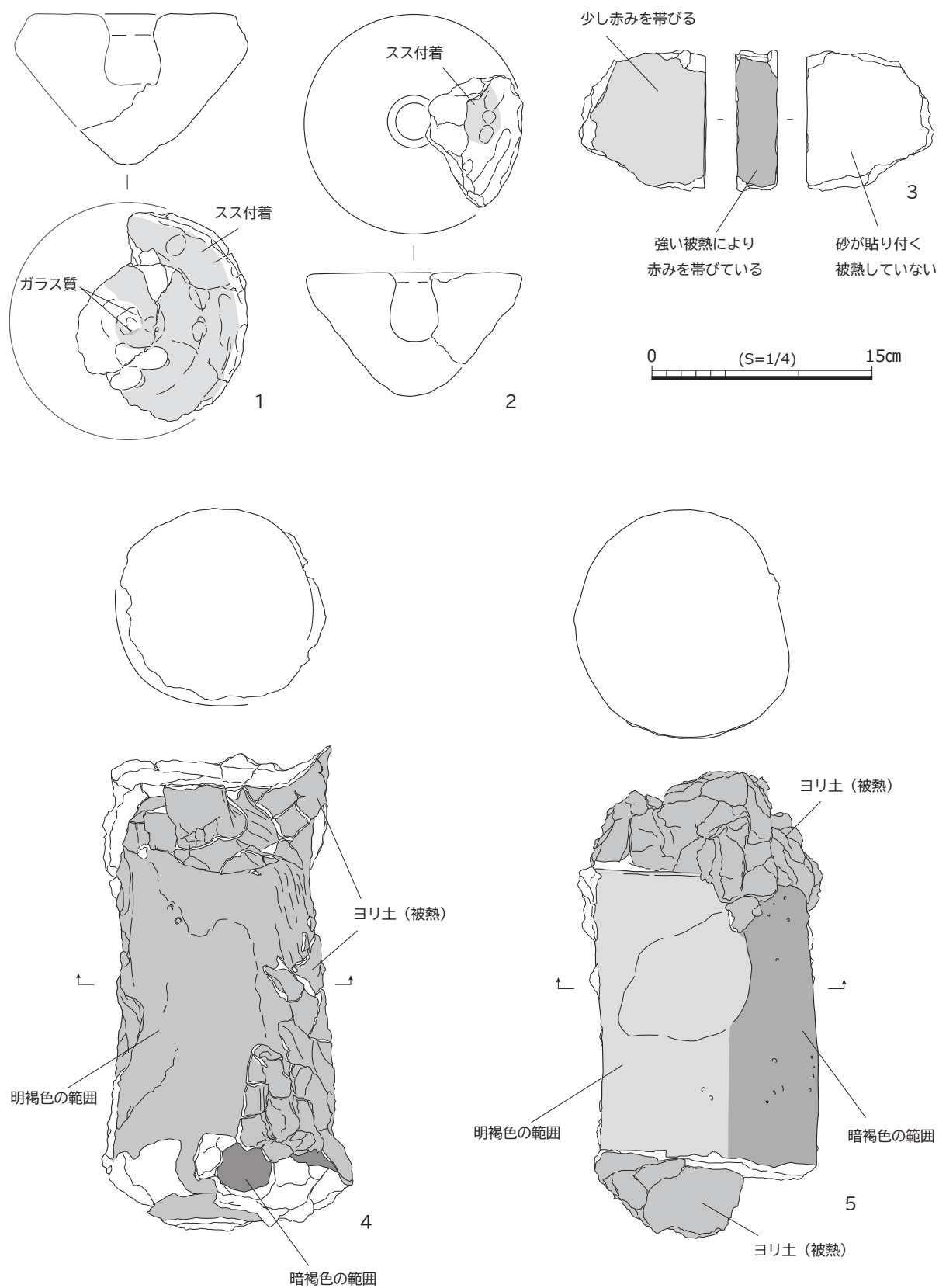


図2 横須賀御殿窯 関連遺物実測図1 (縮尺 1/4)

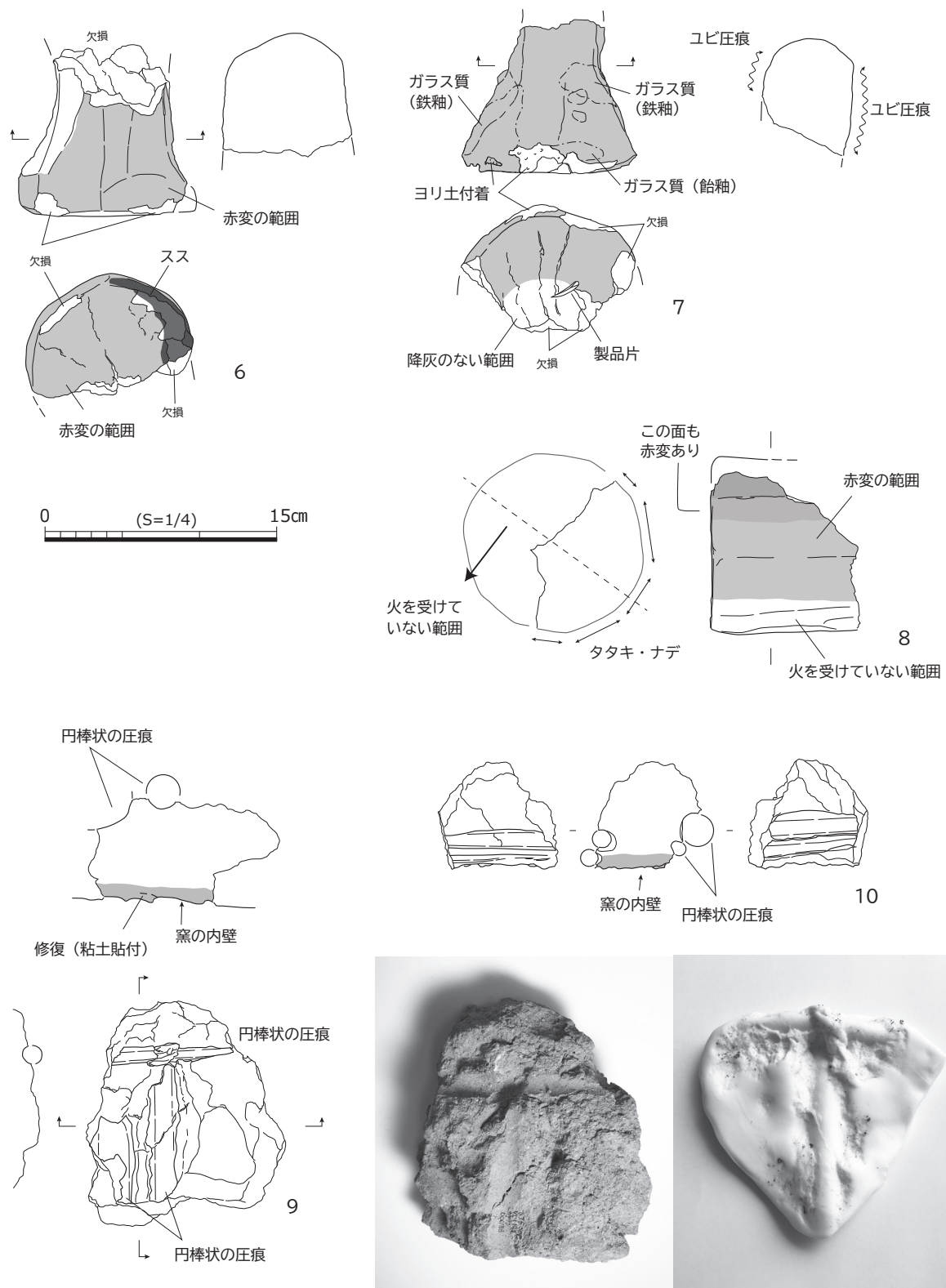


図3 横須賀御殿窯 関連遺物実測図2(縮尺1/4)

その面が床面（あるいは壁面）に埋まった状態で使用されていた可能性が高い。これらの使用方法や機能については瀬戸窯の技術であるのかも含めて不明である。

9, 10 は窯の内側に近い箇所の子窯壁の一部である。構築の際に組まれた竹などの木質芯材の痕跡が、窯壁の内部に円棒状の空洞として認められる。9 では直径 2.2cm と 1.2cm 前後、10 では直径 1.0cm と 2.1cm 前後の芯材の痕跡が認められた。写真や圧痕レプリカで示すように、9 には芯材が十字に紐で固定された箇所が含まれている。地上に広い天井部を構築する大窯でみられる築窯技法の痕跡と考えている。

以上の窯体関連資料には、「瀬戸・美濃系大窯」と「連房式登窯」のそれぞれの構造に関わる部材があり、横須賀御殿の御庭窯は、構造の異なる複数の窯、あるいは瓶子 1 号窯のような両者の連結窯など特殊な形態の窯であった可能性が考えられる。

そのほかの窯道具類にも注目すべき資料がある。11 の円形平底匣鉢は側面に切り抜かれた透孔をもつ。いわゆる切匣鉢は焼成中の炎を制御し釉薬による景色をつくることを意図した窯

道具として、茶入制作と関連する遺物と推定されている。11 の透孔は幅 1.6cm、高さ 3.5cm 前後の方形をなすもので、内面底面に近い下方に設けられている。12 は焼成時に匣鉢が倒れるなどして外面底部に茶入の口縁部が融着したものであり、匣鉢には複数の茶入を納めて焼成したと考えられる。13～17 は報文で色見とされている陶片である。それぞれに異なる胎土（色調）で作り分けられており、13, 14 の刻書「志ろ」はまさしく白い胎土に対応している⁽¹⁾。報告者が推定したようにこれら陶片が胎土別のテストピースとすれば、16 の暗灰色の緻密な胎土は尾張藩の御留土である祖母懐土に近い特徴があり、「そ」は祖母懐土を指している可能性が考えられる。15 の赤褐色の胎土については、刻書は「ス」ではなく、焼成後の赤みのある特徴から常滑の土を示す「と」とも考えられないか。17 は粗く砂礫を含む匣鉢に近い胎土である。刻書の判読は難しいが、以上の仮定から敷衍すると、御殿に出入する陶工（御窯屋）が持ち込む土を示す「窯元」と考えたい。

陶土に関しては、焼成品資料（製品）の胎土分析が瀬戸市・窯元 A 窯跡資料との比較で行わ

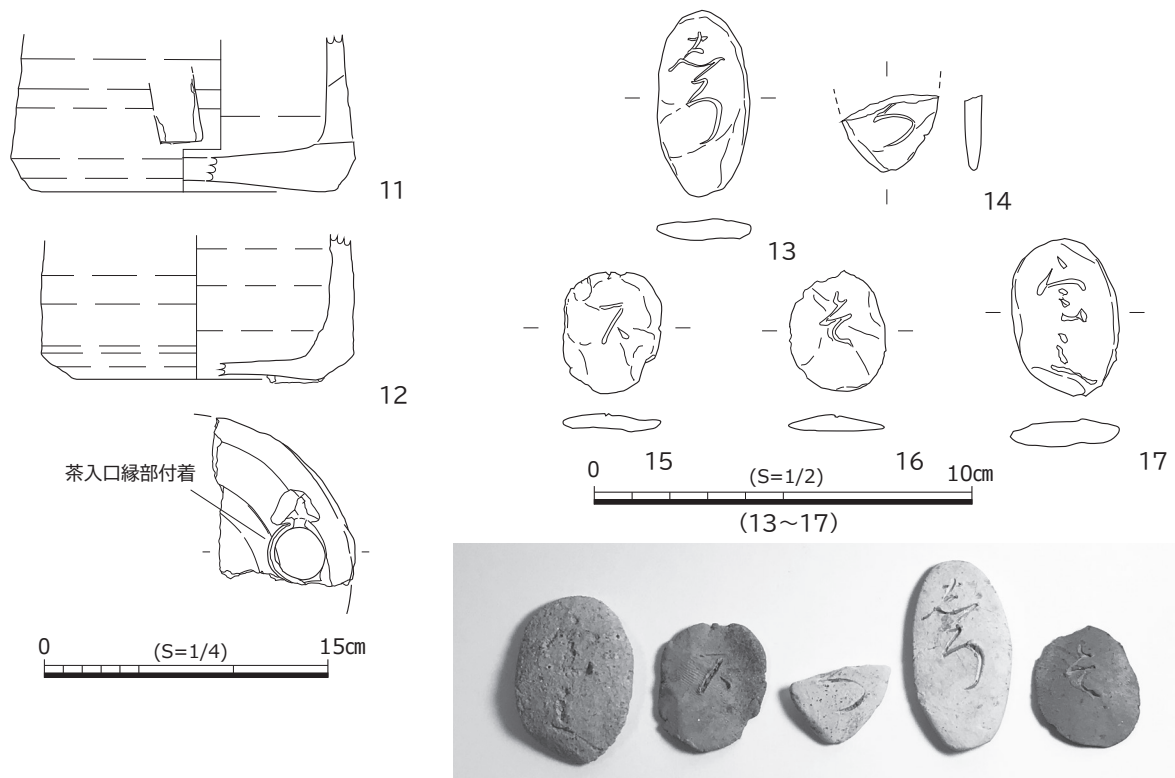


図4 横須賀御殿窯 関連遺物実測図3（縮尺 1/4, 1/2）

表 1 烏帽子遺跡出土の横須賀御殿窯関連資料

図番号	器種	備考	長さ	幅	厚さ	報告書/掲載番号など	カード情報
1	栓	残存約1/2	最大径（推定） 16.0cm	孔径（推定） 4.4cm	高さ10.4cm	（117集『烏帽子遺跡 II』）	IITE00C, VI I 141, SD01第3層, 土器群B, No. 125
2	栓	残存約1/4	最大径（推定） 14.8cm	孔径（推定） 3.2cm	高さ約8.4cm	（第63集『烏帽子遺跡』）	IITE93B, VI I 15h, 褐色砂
3	棚板	残存部側面が火オモテ	-	-	2.8cm	（117集『烏帽子遺跡 II』）	IITE00C, VI I 16n, SD01第3層
4	分炎柱	ヨリ土貼付は新旧あり	約28.0cm	13.6cm		117集『烏帽子遺跡 II』第53図00C区SD02出土窯関係資料	IITE00C, VI I 171, SD02第2層No. 207
5	分炎柱		19cm（柱状部材のみ）	14.0～15.6cm		117集『烏帽子遺跡 II』第53図00C区SD02出土窯関係資料	IITE00C, VI I 161, SD02第2層No. 206
6	窯内部材		残存長11.2cm	残存最大幅 10.8cm		（第63集『烏帽子遺跡』）	IITE93B, VI I 14h, SK35
7	窯内部材		残存長9.2cm	残存最大幅 11.6cm		（第63集『烏帽子遺跡』）	IITE93B, VI I 15h, 褐色砂
8	窯内部材	端部も被熱	残存長9.2cm	残存最大幅 11.2cm	推定径11.6cm	（第63集『烏帽子遺跡』）	IITE93B, VI I 15i, 褐色砂
9	窯壁片		（14.4cm）	（12.4cm）	（5.6cm）	（117集『烏帽子遺跡 II』）	IITE00C, VII I 141i, 攪乱
10	窯壁片		（6.8cm）	（7.6cm）	（6.0cm）	（117集『烏帽子遺跡 II』）	IITE00C, VII I 141i, 攪乱
11	切匣鉢	方形の透孔	-	底径18.0cm	残存高6.0cm	（117集『烏帽子遺跡 II』）	IITE00C, VI I 15m, SD01第3層, 土器群A, No. 40
12	匣鉢	外面底面に茶入口縁部付着	-	底径16.4cm	残存高7.6cm	（第63集『烏帽子遺跡』）	IITE93B, VI I 15h, オリーブ色粘質土
13	円盤状陶片	刻書「志ろ」	4.8cm	2.4cm	0.54cm	第63集『烏帽子遺跡』図15-817	IITE93B, IV I 14g, オリーブ色粘質土
14	円盤状陶片	刻書「口ろ」カ	（2.4cm）	（2.0cm）	（0.38cm）	（第63集『烏帽子遺跡』）	IITE93B, VI I 14h, SK35
15	円盤状陶片	刻書「ス」あるいは「と」	（3.2cm）	（2.6cm）	（0.4cm）	（117集『烏帽子遺跡 II』）	IITE00C, VI I 161, SD02, 第2層
16	円盤状陶片	刻書「そ」	（3.2cm）	（2.5cm）	（0.4cm）	第63集『烏帽子遺跡』図15-815	IITE93B, VI I 14h, オリーブ色粘質土
17	円盤状陶片	刻書「窯元」カ	（4.2cm）	（2.8cm）	（0.6cm）	第63集『烏帽子遺跡』図15-816	IITE93B, VI I 14h, オリーブ色粘質土

れており、両者の主成分胎土は相違する別物であり、横須賀御殿窯ではさらに複数種類の胎土の使用が明らかとされている⁽²⁾。

4. 出土茶入資料の特徴

二代藩主光友の在任期間（1650-1693）に重なる17世紀半ばから後半にかけて操業し、茶入を焼成した瓶子窯跡、小長曾陶器窯跡、横須賀御殿窯跡出土資料と、モデルと想定される中国産の唐物茶入・伝世品瀬戸茶入を図5, 6に示す。

図5と図6で明瞭にみられるように、茶入の形態により模倣の精度に違いが認められる。図5の丸壺、茄子、尻膨、文琳、瓢箪などは、形状・サイズともに写しはほぼ成功している。一方で複雑な装飾をもつ播座茶入では、唐物の写しではなく、室町時代の瀬戸茶入をモデルとしてみるとみられる。図6の肩衝茶入では瓶子窯跡資料に顕著なように、多様な形状があり、サイズも基準は一定せず不揃いである。

今回、資料の再検討として、瓶子窯跡の肩衝茶入を胴部以下の形状から右枠内のように分類を行った。I類は小振りのものにほぼ限定され、

形状の差異が小さく一定の規格の存在がうかがわれる。II類は大型のものが多く、高さの分布は分散し、器壁の厚いものは形状もバラバラである。ただしやや薄手に比較的丁寧に作られているものはよく似た個体が複数存在する。なお、瓶子窯跡出土資料には完形品に近いものが多数含まれる。表面に傷や付着物、釉薬の発色不良

瓶子窯跡出土肩衝茶入の分類基準

I類：明瞭な肩や稜をもたないもの

A- 肩が丸く稜のないもの

B- 不明瞭ながら幅の狭い肩が認められるもの

II類：一定の幅をもつ明瞭な肩をもつもの

◎胴部最大幅となる部分が上位にあるもの

A1- 最大幅が肩付近の狭い範囲となるもの

A2- 最大幅が肩から少し下まで幅をもつもの

◎胴部最大幅となる部分が主に中位にあるもの

B1- 最大幅が胴部中位の狭い範囲となるもの

B2- 最大幅が胴部中位でやや幅をもつもの

B3- 最大幅が肩から中位にかけて続き、底部にかけて屈曲して窄まるもの

B4- 最大幅が肩から中位にかけて続き、胴部が円筒状を呈するもの

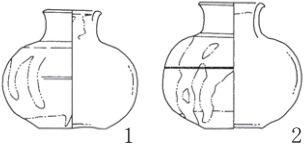
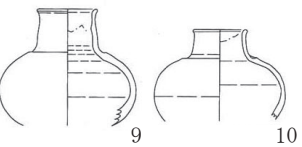
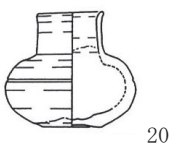
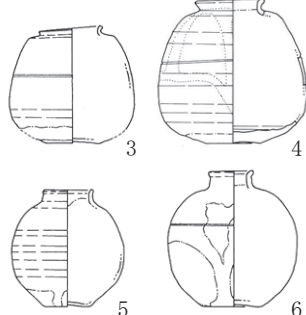
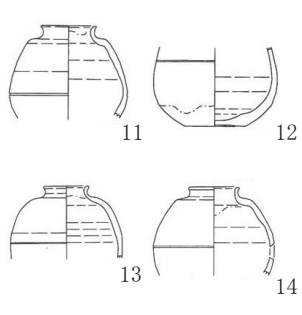
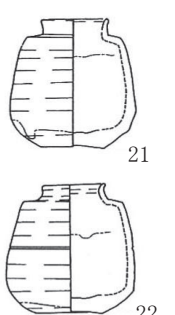
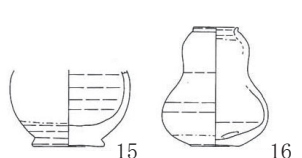
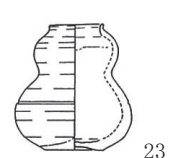
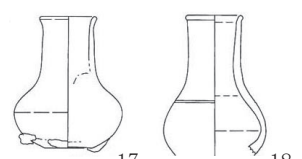
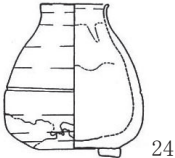
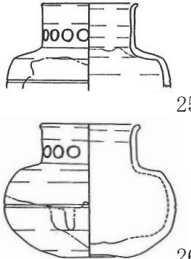
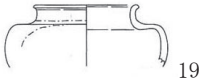
B5- 最大幅が肩と中位にあり、底部にかけて屈曲して窄まるもの

◎胴部最大幅となる部分が下位にあるもの

C1- 最大幅が胴部下位の狭い範囲となるもの

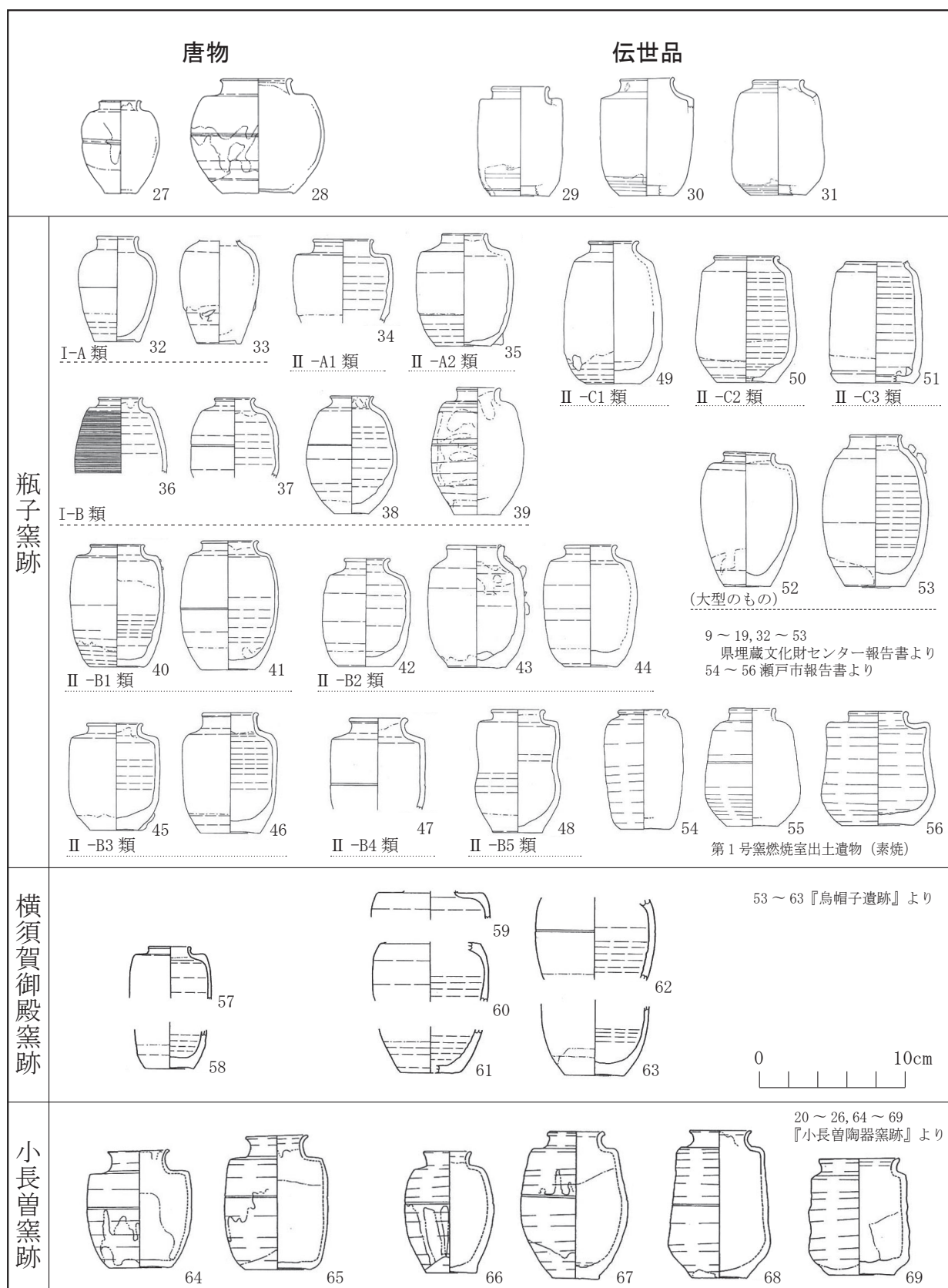
C2- 最大幅の胴部下位付近から底部にかけて屈曲して窄まるもの

C3- 最大幅が肩から下位まで続くもの

	唐物 / 伝世品	瓶子窯跡	小長曾窯跡
丸壺			
茄子・文琳			
瓢箪			
鶴首			
尻膨			
播座			
内海	0  10cm		

(縮尺 1/4) 1; 丸壺青山 2; 丸壺石河 3; 茄子, 銘志賀茄子 4; 茄子, 銘宗伍茄子 5; 文琳, 銘玉藻 6; 文琳, 銘白玉文琳 7; 瀬戸, 銘春慶瓢箪 8; 播座
1~6, 8 は根津美術館 2005『唐物茶入』 7 は愛知県陶磁資料館 1999『茶の湯とやきもの-尾張・三河の茶人たちをめぐって-』より転載

図5 唐物茶入と出土資料の比較1 (縮尺 1/4)



(縮尺 1/4) 27; 小肩衝 28; 肩衝, 銘松屋肩衝 29; 瀬戸野田手茶入, 銘月迫 30; 瀬戸真如堂手
茶入, 銘神無月 31; 瀬戸玉柏手茶入, 銘一本
27, 28 は根津美術館 2005『唐物茶入』 29, 30, 31 は愛知県陶磁資料館 1999『茶の湯とやきもの-尾張・
三河の茶人たちをめぐって-』より転載

図6 唐物茶入と出土資料の比較2 (縮尺 1/4)

はもとより、望まれる「景色」が現出しなかったものは廃棄された。

瓶子窯跡の茶入を分析した井上喜久男は、胎土の粗密と形態の対応関係を指摘し、「唐物茶入の写し」と「唐物茶入の形態から離れているもの」と表現した。前者には肩衝以外の形態と肩衝のⅠ類がこれにあたると考える。また井上によれば、中興名物の瀬戸茶入伝世品の多くは、赤津B窯跡・サカイ窯跡・瓶子窯跡の出土資料のうちに形態を求めることができるという⁽³⁾。瓶子窯跡の肩衝Ⅱ類としたものも、多種類のモデルの模倣が行われていた可能性が考えられる。

5. 近世尾張の茶入生産窯

1) 瓶子窯跡（瀬戸市赤津町）

平成27年に国史跡に指定された瓶子窯跡は、連房式登窯第2小期から第5小期（17世紀第2四半期～第4四半期）の間に操業した1号窯（大窯・連房式登窯連結窯）と2号窯（連房式登窯）

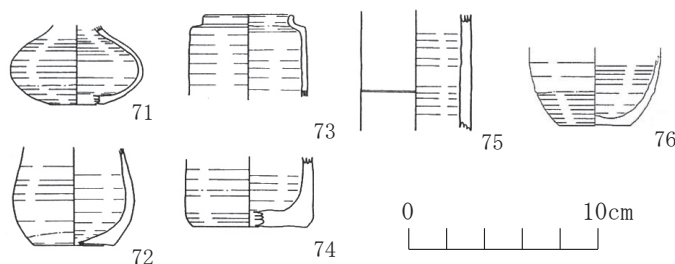
からなる。焼成器種は赤津地区の主要生産品である播鉢、銭甕、半胴甕など鉄釉の施された日常品器種と、天目茶碗や茶入ほか建水、花入などの茶陶がある。

注目すべき資料は、物原から見つかった文字等の記された付札である。これには尾張藩の兵法師範役を勤めた柳生兵助（連也）をはじめとする複数の上級藩士の名がみえ、それらの人物の在職（と隠居を含む）期間は17世紀半ばから後半にかけての時期に集中する。茶入製作と直接の関連性を示す遺物は見つからないものの、切匣鉢ほか特殊な窯道具類や大量の茶入焼成不良品に混じるこうした付札は一部の藩士の強い関与を示している。藩主光友の剣術指南役であった柳生兵助が瀬戸で多くの茶入を作らせたとの伝⁽⁴⁾があり、それが発掘調査により裏付けられたことになる。

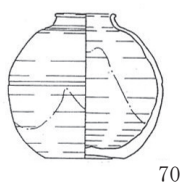
(2) 小長曾陶器窯跡（瀬戸市東白坂町）

小長曾陶器窯跡は昭和46年に国史跡に指定された窯跡であり、平成12年と平成14、15年に史

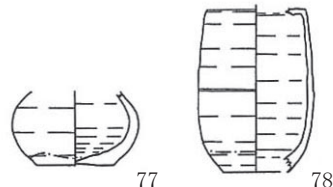
サカイ窯跡



赤津B窯跡



南釜谷古窯



下海古窯

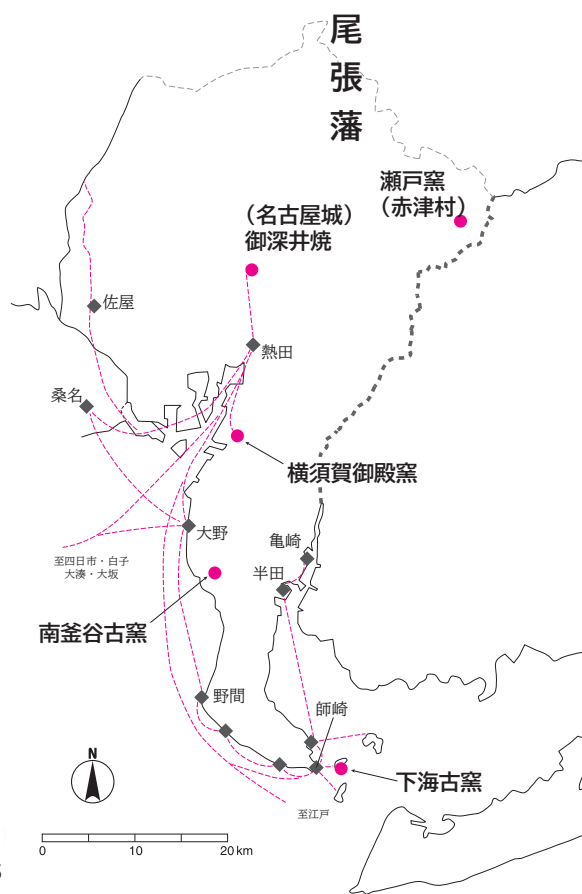
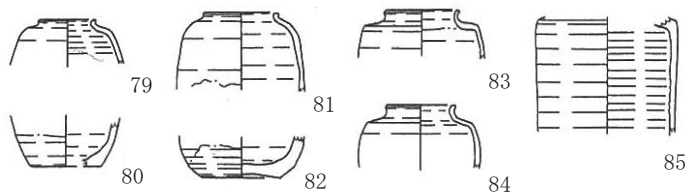


図7 尾張の茶入焼成窯と窯跡出土の茶入（遺物縮尺1/4）

跡整備に伴う発掘調査が行われている。山茶碗、古瀬戸製品を焼成した古瀬戸後Ⅱ期の窖窯が江戸時代に改造・再利用されており、近世陶器では日常品器種の播鉢と、茶入、平碗、端反碗などの茶陶が焼かれていた。ここでの生産の特徴は、茶陶に含まれるはずの天目茶碗がなく、操業は連房式登窯第6小期前半（18世紀初頭）に収まる。操業期間・焼成器種もともに限定的であり、茶入をはじめとした茶陶の焼成に注力して窯体の改造を行うという特別な環境が用意されたと捉えることができる。

天明8年（1788）に完成の『張州雑誌』にある「藤四郎藤九郎時代古窯地名」は窖窯あるいは大窯を指すとされ、「平 小長曾ノ窯元禄一二年（1699）有命彦九郎焼之」の記事は、小長曾窯跡の操業時期と齟齬はなく、平窯については城ヶ根窯が想定されている⁽⁵⁾。城ヶ根窯も古瀬戸後期の窖窯を近世に再利用して茶入を焼成たとみられ、切匣鉢や瓶子窯跡の匣鉢Ⅲ類によく似た茶入専用の匣鉢が出土している。また、土佐尾戸焼の陶工が記した『森田久右衛門江戸日記』では、『張州雑誌』記事よりも20年近く早い延宝6年（1678）9月に瀬戸赤津で茶入を焼く加藤彦九郎の「大釜焼」の窯を訪れている。

（3）南窯谷古窯（常滑市多屋釜谷）

藩主の知多巡行時の宿泊所である大野御殿が置かれた大野湊付近からは南へ約4.0kmの距離にあたる。中世の窯跡が集中する毘沙グゼ古窯群の西側、丘陵の西向き斜面に立地する。1969年の調査で検出された窯体は、残存長約10m、7房の焼成室が確認された縦狭間構造の連房式登窯1基であり、焼成室の天井支柱については瀬戸窯の穴田窯跡1・2号窯に窯体構造の類例が求められる。焼成器種は天目茶碗、丸碗（鉄釉・灰釉）、小碗、小杯、輪禿皿（鉄釉・灰釉）、鉄絵皿、香炉、片口、播鉢、半胴甕、徳利、茶入などがあり、主に播鉢・碗・皿など瀬戸窯と同様の日常品器種が量産された。茶入では肩衝と丸壺形と思われる資料がある。操業時期は17世紀第4四半期と推定されている。

実見した範囲では、製品の胎土はどれもほぼ同様で、白色より少し赤みがかかった色調で砂礫を含む胎土は瀬戸窯とは異なり、灰釉輪禿皿などは施釉部分も含めてやや暗い色調を呈し、

軟質の焼成のものが少ないという印象であった。

（4）下海古窯（知多郡南知多町日間賀島下海）

知多半島の南端の師崎港からは南西に2.4km、愛知県知多郡南知多町日間賀島に所在し、窯跡は島の西部の断崖の端にあたる場所に立地する。昭和36年に200mほど離れた日間賀中学校の生徒が発見し、翌年に地元研究者と瀬戸考土サークルにより発掘調査が行われた。

窯体は「瀬戸・美濃系大窯」構造の1基である。残存する焼成室床面の規模は、分炎柱から焼成室末端付近までが約4.7m、最大幅約2.3mを測る。分炎柱の左右ではなく、背後の奥行約40cmの平坦面に小分炎柱（痕跡5ヶ所）がみられる点、一般的な大窯の構造と異なる。その奥に高さ20cmの段が設けられて焼成室となる。焼成室床面主軸線上に天井支柱の痕跡2ヶ所が認められる。操業時期は17世紀前半の限られた期間と推定され、器種構成に瀬戸赤津地区との類似性が指摘されている。

焼成品の鉄釉製品は二重掛けされたものが目立ち、茶壺と思われる小型の壺、茶入（肩衝、芋子、茄子）、小型の鉢の器種がある。素焼では丸碗片、播鉢・小皿と管状土錘がある。そのほか窯体部材の支柱の一部、窯道具では匣鉢・匣鉢蓋・輪ドチ・ニギリ・馬爪形焼台があり、このうち平底匣鉢の一つには内面に茶入の融着が認められる。茶入はいずれも器壁を薄くつくり、内面が無釉の露胎となるもの、錆釉あるいは外面と同釉を施すものそれぞれがあった。焼成温度等条件により左右されている可能性が残るものの、実見では胎土に白色、黄色、暗褐色など異なる色調が観察できた。

（5）そのほかの瀬戸（赤津村）の窯跡

サカイ窯（連房式登窯第2～第3小期）では山茶碗・古瀬戸を焼成した窖窯が改造・再利用されている。赤津B窯の窯体は大窯であり、構築の際に床下の深いところで1.2mにも及ぶ盛土をするなど大規模な工事が行われている。。窯元A窯跡群は尾張藩の御用を勤める御窯屋の管理する窯で、このうち窯元A1窯（連房式登窯第3～6小期）は近世に新たに造られた大窯構造の窯である。

江戸時代中期に成立の『昔咄』では、茶入製作にふれた次のような記述が知られる。光友の

大殿時代（元禄6～13年）、役人から昔のように良いものがなく近年は不出来となっている理由を問われた瀬戸の陶工が返答するには「…古代は諸事入用にも焼損じにも不構、百やきて一ツ出来ればよきと云ふ心得にて、やきしゆへ、よき物も出来し。只今にても、損失入用にかゝらず、存分にやきたつれば、十分に宜しき物でかすべき由いふにより、何も談合ありて、金子二百両すて物にして渡し、かれらが存分にやかせられしに、如案大分焼損せしが、其内恙なくやけし物ハ至極宜しく大でき物なりし。則ち茶入・茶わん・花いけ・水指の類ハ、何も箱でき、長持につめて、御屋形の御土蔵につまりぬ。いつにても費用いとわざる時ハ、至極大でき物がやき出せる由。…」とある。費用や労力を惜しまず、当時としては非効率な技術である単室構造の「大窯」や「窖窯」が再利用、あるいは新たに復刻して築造された意図は、まさしく優品の茶入製作にあったと思われる。

6. まとめと課題

光友は、ほぼ隔年に近い状況で江戸参府と国元滞在を繰り返し、参勤と交代は各19回を数える（松村2015）。しかも国元にあった間のかんりの期間を横須賀御殿に滞在していたようで、藩主渡御は御殿竣工の同年寛文6年（1666）を初回として、最後となる元禄3年（1660）までにのべ29回にも及ぶ（「編年大略」）。潮湯治のため⁽⁶⁾の横須賀御殿との行き来は、「渡御」とも記されているように名古屋城から堀川の水運

が利用された。

寛永20年（1643）1月、世嗣光友の諸大名を招く興行の茶湯にて藩主義直の所望により小堀遠州が茶を点てた記事があり（『源敬様御代御記録』）、「きれいさび」の茶風で数多くの瀬戸茶入を取り入れた大名茶人、遠州（1579-1647）と光友は対面している（佐藤2000）。そして遠州没後、武家茶道を継承した片桐石州（1605-1673）は、記録にある200会の茶会の約7割で瀬戸茶入を用いていた（下村2025）。

17世紀の茶入製作は、効率的な量産を目的とする日常品器種とは異なり、唐物写しと優品を追求する実験的ともみえる環境を整えた上で行われた。それは藩主の御庭窯だけでなく、藩の御用窯にも共通する状況であり、窯体構造をはじめ窯道具、陶土の調合などに一般的ではない特異な様相として認められる。これらを繋ぐところには、おそらく尾張藩の特殊な職掌である御窯をつとめる屋の関与があり、尾張藩の窯業政策の推移を考える糸口は、御窯屋の具体的な役割と遺跡資料との関連にも求められよう。瀬戸茶入の評価が確立し、その評価が持続していた17世紀の武家茶道の流行を背景に、尾張藩が関与する茶入生産があったことは明らかである。

謝辞 資料調査等でお世話になり、またご助言等いただいた瀬戸市文化振興財団、とこなめ陶の森資料館、南知多町教育委員会、赤羽一郎氏、井上喜久男氏、岡本直久氏、小栗康寛氏、小澤一弘氏、金子健一氏、川添和暁氏、杉本真由氏、仲野泰裕氏に感謝を申し上げます。

註

(1) 粘土採掘孔および原料粘土の調整（水簸）施設と想定される遺構が検出されている穴田窯跡遺跡付近では、上水野地内の鉾山で産出されていた陶土のひとつに「水野白粘土」がある。夾雑物の少ないきれいな粘土で可塑性に優れてコシが強いという特徴がある。（金子2014）

(2) 三辻利一「第2節 横須賀御殿出土近世陶器の蛍光X線分析」『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第63集／なお、主要成分胎土の素材粘土の分布域では窯元A窯跡は猿投的、横須賀御殿窯のものは瀬戸・多治見的地域と見做すことができ、いずれも離れた地域から粘土を入手していることが指摘されている。

(3) 井上1998、美術鑑賞史のなかで「窯分け」「手分け」という基準により示されてきた瀬戸茶入の年代観について、井上喜久男により考古学的手法を用いた客観的な年代論として製作年代が示されている（井上1998）。

(4) 江戸時代中期に成立、尾張藩士近松茂矩著の『昔咄』（大津町の連也の屋敷について）見事成る庭にて、瑞龍院様（光友院号）泰心院様（綱誠院号）御連枝様方も度々御成有りし。泰心院様、おれも庭をすくが、連也が物ずきにハ不及と、御意ありしとぞ。

又牡丹をすき、茶入をすきて、瀬戸にて大分やかせぬ。」／大正9年成立の『をはりの花』の陶工銘款をあつめた「風の巻」では「蓮也ハ勤仕の暇に茶事を好ミ陶器を作るを娯楽とし」「其作自ら気格ありて上好なり」「連也ハ寛文年間に茶入一百を作り瀬戸に於て焼かしめたる事あり」とある。

(5)『瀬戸市史 陶磁史篇四』

(6) 松原 2023、横須賀御殿設置理由に軍事目的（「軍旅」）があったとする記述について検討が加えられている。塩湯治以外の利用を示す具体的な史料はなく、少なくとも光友が藩主であった時期は海防に憂慮が必要な時代ではなかった。知多半島ではすでに重要な港として大野湊があり、塩湯治（海水浴）の海岸としても広く知られていた。大野村の庄屋、平野氏の邸宅から整備された大野御殿は、初代義直の知多巡行をはじめとして光友も含めて江戸時代を通じて度々尾張藩主が利用している。

引用・参考文献

横須賀町史編集委員会 1969『横須賀町史』

東海市教育委員会 1991『横須賀御殿学術調査研究報告書』

神崎かず子 1991「瀬戸茶入の基礎研究（1）—瀬戸窯出土の茶入—」『愛知県陶磁資料館研究紀要 10』

仲野泰裕 1993「尾張藩の御庭焼と御窯屋」『愛知県陶磁資料館研究紀要 12』

藤澤良祐 1993「瀬戸大窯の概要」『瀬戸市史』陶磁史篇四

井上喜久男 1996「考古学からみた瀬戸茶入」『遠州の観た茶入』五島美術館特別展図録

小澤一弘 1997「尾張徳川家横須賀御殿の御庭焼について」『生産の考古学』倉田芳郎先生古希記念会編，同成社

仲野泰裕 1998「尾張藩御庭焼と御小納戸役」『檀崎彰一先生古希記念論文集』真陽社

井上喜久男 1998「瓶子窯跡に見る瀬戸茶入」『檀崎彰一先生古希記念論文集』真陽社

井上喜久男 2000「瀬戸茶入と唐物茶入」『茶の美術 茶道学体系五』淡交社

仲野泰裕 2000「御用窯と御庭窯」『茶の美術 茶道学体系五』淡交社

佐藤豊三 2000「徳川義直と寛永の文化人」『金鯢叢書—史学美術史論文集—』第27輯，財団法人徳川黎明会

井上喜久男 2004「瀬戸茶入の制作年代」『野村美術館研究紀要』13

金子健一 2015『瀬戸窯の復興—黎明期の江戸時代窯業—』平成30年度公益財団法人瀬戸市文化振興財団 企画展

原 史彦 2022「尾張領内御殿の存亡と機能（上）」『徳川林政史研究所 研究紀要』56号

原 史彦 2023「尾張領内御殿の存亡と機能（下）」『徳川林政史研究所 研究紀要』57号

松原隆治 2023「横須賀御殿建設の目的に関する一考察」『研究報告とうかい』第9号

下村菜穂子 2025「石州が用いた道具—茶の系譜を示す茶杓と茶入—」『武家の正統 片桐石州の茶』根津美術館特別展

岐阜県瑞浪市教育委員会 1981『田ノ尻窯』

伊藤嘉章（編）1984『高根山古窯跡群 発掘調査概報』岐阜県土岐市教育委員会

藤澤良祐 1986「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 V』

林 順一（編）1988『隠居西窯跡発掘調査報告書』岐阜県土岐市教育委員会

林 順一・加藤真司（編）1992『隠居表1・2号窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会

山下峰司 1993『窯元A窯跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第3集

秋田幸純編 1996『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第63集

多治見市埋蔵文化財センター 1997『小名田窯下古窯跡群発掘調査報告書』

青木 修 2000『瓶子窯跡』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第22集

河合君近（編）2002『国指定史跡 小長曾陶器窯跡』

石黒立人編 2003『烏帽子遺跡 II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第117集

武部真木（編）2005『瓶子窯跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第135集

財団法人瀬戸市文化振興財団 2008『瀬戸窯 瀬戸市内重要遺跡試掘調査報告』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第37集

河合君近 2012『針原窯跡 国指定史跡小長曾陶器窯跡』瀬戸市文化振興財団調査報告書第44集

金子健一 2014『穴田窯跡 I—遺構編—』公益財団法人瀬戸市文化振興財団調査報告第52集